22102037

International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

JAPANESE A2 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A2 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A2 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Thursday 13 May 2010 (afternoon)
Jeudi 13 mai 2010 (après-midi)
Jueves 13 de mayo de 2010 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Section A consists of two passages for comparative commentary.
- Section B consists of two passages for comparative commentary.
- Choose either Section A or Section B. Write one comparative commentary.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- La section A comporte deux passages à commenter.
- La section B comporte deux passages à commenter.
- Choisissez soit la section A, soit la section B. Écrivez un commentaire comparatif.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- En la Sección A hay dos fragmentos para comentar.
- En la Sección B hay dos fragmentos para comentar.
- Elija la Sección A o la Sección B. Escriba un comentario comparativo.

© International Baccalaureate Organization 2010

問題 A か問題 B のどちらかを選び、答えなさい。

問題 A

次の二つの文章について、共通点・相違点・主題を分析し比較しなさい。またその際、筆者が自分の考えを伝えるために用いている文の構成・語彙・言葉の象徴するもの・文体などの要素を考慮に入れなさい。

テキスト 1

はたしてインド人は空中三メートルを浮揚(ふよう)するか

インドに行くことになった。毎度ながら別にたいしてスルドイ目的意識やテーマというものはない。それじゃあこのへんでそろそろインドへ行ってみましょうか？うーんそうですなあ、というような程度である。しかしインドという国はこの程度の意識と態度ではたちまちインド研究家およびインド崇拝派および印度的瞑想思索人(いんどてきめいそうしさく)およびインド哲学放浪者およびヒンドゥ教を邪教(じゃきょう)から守る会および東インド解放戦線地むぐり砂けむり派等々からさまざまな批難指弾のひとかたまりを浴びそうなこころもとなさ、というものがある。これがロサンゼルスや香港(ホンコン)へ行くということならばちょっとヒヤカシがてらのついで歩き、というような気軽さというものがあるが、インドとなるとどうもそのあたりがすこしばかり違ってくる。ロスの海岸へ行ってさっとひと泳ぎしてＴボーンステーキを食べてこようかと思って・・・・とか、香港行って点心(てんしん)ありったけ食って免税の外国時計買ってそれからついでに高級ブランデー三本ばかし買ってさらに葉巻百本買ってよ、そんでもまだ香港ドルが二百ドルも余ってんだからよお、・・・・なんていうようなことがインドではちょっと言いにくい。

「インドに行ってカレー食ってターバン巻いて帰ってくるぜ」なんていうようなことを言ったりしたらたちまち日本国インド派哲人たちにケーベツ光線の十字砲火を浴び、ギャッと叫んで二メートルばかりころがってしまうような気配というものがなんとなくある。どうしてなのだろうか、とすこしのあいだ考えたのだけれどそれでもよくわからない。考えてもわからないところがいかにもインドらしいのかもしれない。そこでしようがないから一つの方針をもった。インドに行くにあたってインドの本を読んだり最新情報を聞いたりガイドブックを読んだりするようなことは一切やめよう、ということにした。インドに対して何も問題意識をもたないかわりに何も予備知識をもたずにまっさらな気持ちで立ち向かおう！と思った。せめてそれだけが目下のオレにできることなのだ！と思った。何もそんなにまなじりつり上げることもないかもしれないがとにかくそう思った。

（椎名誠『インドでわしも考えた』1984 年）

椎名誠（1944 年～）作家、エッセイスト、写真家。

点心(てんしん)　・・・・　中国料理で、簡単な食事になる麺(めん)、かゆ、餅(もち)、まんじゅうなどのこと。

テキスト 2

近い旅　遠い旅

直行便で、私は東京のにおいを体につけたまま、パリ空港に降り立った。東京は正午だったが、日没を追って飛び続けたので、パリではまだ宵の雑踏の残る十時過ぎだった。定刻に着けば八時半のはずであり、芝居にも音楽会にも間に合う時間だった。

実に遅まきながら、私はこのジェット機時代の空間・時間感覚の変化を痛感した。あの 33 日の航海は、今から思うと、気の遠くなるような長さだった。あのころ、フランスもドイツもはるばる遠い国だと思ったのは当然だった。それはただ空間的に遠いだけではなく、飛び魚が飛んだり、フカが灰色の背をのぞかせたりする幻想的な南海の国々の向こうにある、ほとんど童話の国に似た遠さなのであった。

しかしパリ直行便はそんな幻想を子供じみた一片の感傷として退けてしまう。むろんそこにも旅立ちの興奮があり、空を飛ぶ冒険的な昂揚感はみなぎっている。だが、旅行者を支配しているのは、なお日常的な、多忙な、やや埃っぽいリズムであり、雰囲気である。遠めに見る空港には孤独の影はあるが、しかしそれは都会生活が孤独であるという限りにおける孤独である。そこにつきまとうのは、＜日常＞という、この日々の、単調な、無感動的な惰性である。

私がパリの街に入ったとき、いつもながらの感動のほかに、一種特別な感覚がつきまとっていたが、それは実は、東京の＜日常＞を、着古した外套のようにまだ身につけていたことから生まれていたようだ。

考えようによれば、そのために突然現出した異国の都会が、いっそう幻想的な趣をもって見えてくる、ということはありうる。事実、私は何日もそうした酩酊感から覚めることができなかった。

しかしそれ以上に強いのは、東京の＜日常＞がそのままなんら質的な変化を遂げずに、パリの日常に接合されている、という実感だった。ごく健全な感覚として、銀座の通りは、同じくシャンゼリゼーの大通りにつながっていた。そこを歩くのは、夢の中の人物ではなく、向こう三軒両隣の人間と同じ人間だった。新宿でショッピングをしたその翌日、同じ気持ちでサン・トノレをショッピングできるのであった。

私はこういう実感が西欧文化やパリ生活の神格化、神秘化を排除し、偽りのヴェールをはぎとったことを、やはりいいことだと思わずにいられなかった。少数の旅行者、少数の外国文学者の手に外国事情が特権的に握られている時代が終わったことを、しみじみ喜ばずにはいられなかった。

しかし同時に、そこに多少の危惧を感じたのも事実だった。それは、こうした神秘のヴェールをはいで、正体を見とどけた、と考えるその見方のなかに、東京から引きずっていった埃っぽい＜日常＞が、居座り続けているということに対する危惧なのであった。

（辻邦生『近い旅　遠い旅』1973 年）

辻邦生（1925～1999 年）小説家、フランス文学者。

昂揚感　・・・・・・・・　気持ちが高ぶること
シャンゼリゼー　・・・　パリ市の中心街の一つ
サン・トノレ　・・・・　シャンゼリゼーに近い道路

問題 B

次の二つの文章について、共通点・相違点・主題を分析し比較しなさい。またその際、筆者が自分の考えを伝えるために用いている文の構成・語彙・言葉の象徴するもの・文体などの要素を考慮に入れなさい。

テキスト 3

人生で三回恋愛できれば大もうけである

10 代の頃、私には恋愛についての明確なビジョンがあった。
＜ただ異性であるだけのもう一人の私＞
これが、恋人についての当時の私の定義づけである。
古く、プラトンかアリストテレス（どっちか忘れた！）によると、人間はかつて男女が組み合わさった状態で一個の完全体であった。それが、何かのはずみで離れ離れに男と女になってしまったので、失ってしまったもう一方の片割れを求めて恋愛するのだそうだ。
また、倉橋由美子の小説には、何度か、
＜はぐれてしまった双生児の兄を求める私＞
が登場する。
であるから、
＜ただ異性であるだけのもう一人の私＞
を恋人とみなすのは、理論的には完璧であると、私は考えたのだ。
1970 年前後、私の理想的愛の情景は、当時のロックグループの歌詞に数多く認められた。
なかでも、クロスビー・スティルス・ナッシュ＆ヤングの「アワー・ハウス」（僕たちの家）がきわめつけだ。
「ボクは灯りをともす
君は今日買ってきた花びんに花を生ける
僕たちの家
僕たちの家はとってもとっても素敵な家
人生は時々つらくきびしかったけれど
今すべては気持ちよく僕ときみの回りにある」
人里離れた山荘で、二人きりで暮らす恋人たちの情景。これこそが愛の理想像だわと、まだ恋も知らずの少女であった私は考えていたのだ。
また、J・D・サリンジャーの短編「マディソンはずれの微かな反乱」の中に、次のような描写がある。
主人公の男の子は高校を中退し、そしてニューヨークの電話ボックスからガールフレンドの女の子に電話を入れる。
「駆け落ちしよう。今、すぐに。どこか田舎に行くんだ。そこで僕は目も言葉も不自由な人のふりをして、ガソリンスタンドで働く。そして、きみも、目も言葉も不自由なふりをして一緒に暮らすんだ」
もちろん、この短編を読みながら、私の頭の中では「アワー・ハウス」がガンガン鳴り響いていたのだった。

どうやら、若い頃から私が、
「結婚したい、結婚したい」病にかかっていたのは、この曲とこの短編のせいだったらしい。二人で完璧な愛の暮らしを築くのだと勝手に思い込んでいたのだ。（中略）
＜ただ異性であるだけのもう一人の私＞
を恋人の条件として物色していた私は、趣味、感覚、生活信条、すべて私と同じ男性がきっとこの世にたった一人存在すると信じていた。けれど、実際ほれた相手は、
「ぜーんぜん違う」
と、自分でもあきれかえるタイプの人間だった。

（紫門ふみ『恋愛論』1990 年）

紫門ふみ（1957 年～）漫画家、エッセイスト。

テキスト 4

High and dry（はつ恋）

とにかく私はその午後ちょっと遅刻して教室に入って、キュウくんに会釈した。彼はうなずいた。

私は席につき、騒がしくしないようにそうっと絵の道具を出して、昨日まで描いていた絵の続きを描き始めた。教室の中は静かであたたかく、絵に集中しているうちに私はなんだかぼうっとしてきた。目を休めようとしてふと顔をあげ、ぼんやりと窓の外を眺めているときに、それは起こった。

月下美人の植木のわきから、小さい人間が走り出ていったのだ。

その人間は、すっと窓の外に消えていった。緑色の服を着て、はだしだった。目が、くりっとしていた。

「あ！」と私が小さい声で言い、まわりを見たら、キュウくんが声を出さずに「あ」という顔をしてそっちを見ているのを見つけた。

あとの人たちはどうしてだか全員、少しも顔をあげなかった。

そして、ふたりは同時に窓の外を見上げた。

窓の外でも何かが起きていた。

なんだかわからないが空がぴかっとまぶしく光って、空からさあっと金色の粉が、まるで雪みたいに静かに降ってきたのだ。ふわふわと、風に舞うようにして窓一面に。

「雪みたい・・・・。」

同時にそうつぶやいて、私たちは顔を見合わせた。

ふたりが口にしたことはたったそれだけ。

そして、ふたりは同時にもう一回、月下美人を見て、何もないことを確認した。

それからふたりは全く、そのニュアンスまで同じふうに「今、確かに見たけれど、誰にも言うのよそう」と思いあった。お互いが寸分もたがわずにそう思ったということまで、お互いわかった。

そして、全く同じことを考えていたそのとき、彼の目と私の目はひとつの体についているひとりの人間の目のように、同じだった。

そしてふたりは何でもないふうに、それぞれの仕事に戻った。私は絵の具を塗りまくり、彼はみんなの絵を見て回り始めた。

それでも、私の目にも彼の目にも、あの小さい妖精（ようせい）のようなものの姿はやきついていた。

まだ胸がどきどきして、それは止まらなかった。

そして私はなんとなく感じていた。

「なんてかなしい！　このことはもうきっと、一生に一度しか起こらないんだ」と。

窓枠は光を反射して冷たく光り、外に見える木の枝は焦げたように茶色だった。淡い光が手元を照らしていた。

私はきっと一生秋が好きだろう、と私は思った。私は人と・・・・特に男の人と何かをわかちあったのは初めてだった。こんな大切な何かを。

あの人は信じられる人だと、私は思った。あの人のことをもっと知りたいと。（中略）

この一瞬はまさに永遠で、ふたりは魂のままの姿にうっかりなってしまい、ただその心の目で同じものを見て、同じところに存在したということ。別々の人間がたまたまひとつになった、それは本当に美しく、ありえないはずの瞬間だったのだ。

私の目には涙がにじみ・・・・もうその気持ちを抑えてはおけなかった。

なにがなんでも、なにかの形でこれを人生に組み込みなくちゃ、そういういやしいようなあせりのような、どうしようもない消せない気持ちでいっぱいになったのだ。速くなんとかしないと、とりかえしのつかないことになってしまう、そういう気持ちだった。

（よしもとばなな『High and dry（はつ恋）』2004 年）

よしもとばなな（1964 年～）小説家。

月下美人　・・・　サボテン科の植物。夏の夜、長さ 30 センチほどの白い花が咲く。花は芳香を放ち、数時間でしぼむ。